

ソロモン諸島での協力隊活動を通じて広がった世界

大内 比呂子

(18-1, ソロモン諸島, 家政教育, 滋賀県立彦根西高等学校)

始めさせていただきます、ソロモン諸島で活動してました大内と申します。私は滋賀県の公立高校で家政科のある学校なのですが、そちらの方で 6 年間教員として働いて、二年間青年海外協力隊として、そのあとまたもとの学校に戻っていま勤めているという状況です。ちょっとここから座らせて発表させてもらいます、失礼します。私は 18 年度一次隊で参加させていただきました。その時約 68 カ国 400 名の隊員が派遣され、いろんなところで活動したということになります。私自身なぜ参加したのかというと、大学の中から夢であった昔お世話になった外国人にお世話になった恩返ししたかった、教科書の中だけでない本物のいろんな世界を見てみたかった、厳しい生活の中に身を置いて強くなりたかったということがあります。

ソロモン諸島って派遣が決まった時にいったいどんな国なんだろうという情報がなかったのですが、どんな国なのかと世界地図でみると、南西太平洋上オーストラリアの北東千八百メートルにある小さな島国になります。六つの大きな島と 1000 近くの小さな島からなる国と言われております。首都はマダルカナル島のホニウオラというところになります。国旗はこのような国旗で緑は国土を青色は海の色を黄色は太陽の色をこの五つの星は南 12 星をその後ろのソロモン諸島の五つの島を表しているといわれております。面積も非常に小さく四国の 1.6 倍の大きさしかありません。民族は南シナ系と言われる民族がほとんどだったのですが、このメラというのはメラネシアのメラっていうのは黒いって言う意味があって肌の黒い人種がほとんどでした。このメラネシア族っていうのはバヌアツにも多いといわれております。気候は熱帯モンスーン気候で一年を通じて高温多湿でずっと暑い状況でした。言語は英語にオランダ語とドイツ語が入り混じってできたといわれるピジン語と言われる言語を使っていました。学校の授業でもこの言葉しか通じなかったのも、首都に行くと英語も一部通じるのですが、みんなほとんどこの言葉を使っていました。この言葉をしっかり話せるようになるのにやく 3 か月かかりました。どんな感じかちょっとやってみますと、その下ピジン語会話とありますが、英語と近いのですが、少しなまったような感じです。お金はソロモンドルというのがありました。1 ドル 15 円なんです、ソロモンドルを日常的につかっていたんですが、貝殻というのも使われていて、これは昔本当にお金として使われていたんですが、今では花婿が結婚の際に花嫁に渡す結納のようなものという時にだけ使われているということです。それがそのお金として価値のある貝殻ということになります。時差は日本より 2 時間早く、経済はほとんどが自給自足、魚、木材の一部が輸出されています。歴史的な背景としましては、第二次世界大戦の激戦地だった

ということで有名です。とくに首都のあるガダルカナル島では別名餓島といわれ、飢餓とかですが、ここで第二次世界大戦中多くの兵士が飢えと怪我でなくなったといわれております。約二万数千人と聞いております。その戦争のあとが今も当時のままのこっているのですが、日本の輸送船きどうなか丸といいますが、そのままの形で放置されていたり大砲や爆弾、刀などいまでもときどき出てくると聞きました。私も実際こういったものを目にしました。

では私がソロモンで何をしてきたのかという活動の内容を話させていただきます。まず現地の学校で家庭科教員として働く、村の女性と一緒に住んでそこから通っていたので、その女性に裁縫と料理を指導する、あと地震被害支援清掃活動、あとで話をさせていただきますが、あと原始的な生活ということでしてきました。学校はこの後ろにあるこの小屋みたいなのが学校なんです、この場所に来た時は非常に驚きました、これが学校だということで。築 30 年だそうです。私は高校に勤たんですが、小学校が併設されていて。これは集会のときの様子なのですが、小学生も隣に並んでやっていました。みんな非常に元気一杯でごらんのとおりの制服はありました。制服をきている状態ですが、結構川で手で洗濯するのですぐぼろぼろになって、しかも高温多湿のなかで洗濯して乾かしても、なかなか湿気が多くて、カビだらけになって何回かこのカビを取ってあげようと試みたこともあるのですが、洗たくしたあとすぐ生えてしまうので、まあこれはどうにもならないということで、自分の持っていった衣服もほとんどカビだらけになってしまったんですけども、まあそのまま現地の自然に逆らわない生活になりました。

ソロモンの教育制度としては初等教育小学校が 6 年間中高教育が 5 年間義務教育制度はなく小学校に通える生徒はいるのですが、経済的に厳しい家庭の子は通えないということで、成人の識字率は 62 パーセントです。学校に来てもなかなか文房具も持ってこないで友達のを借りて使いまわすようなことを見たのですが、見たときはクラスの子も嫌がることなくでもそういうところは自然と協力できる姿がいいなと思ったんですけど、よく協力していました。教科書は政府から支給されたものを学校だけが所有していて、生徒に貸し出すという形でした。ノートだけは生徒からの学費から支給されていました。私は家庭科ですので、調理実習をしたりとか、あと実習だけでなく環境教育・性教育に関してもあって、環境教育をしているときに自分の身の回りをきれいにするというのでココナッツの葉っぱをとってきてその芯だけをけずって簞にして教室用の簞にしたということもしました。あと実習で使う食材を何とか作れないかなと荒地になってるところをきれいに掃除して種を植えてきゅうりとかトウモロコシトマト豆などをつくるということもやってみました。あとこれはシャツをつくったりプロミスリングを作ったりしているところです。右下は授業の後に村の女性とか学校の先生、手芸を学びたいという人を招いての、手芸講習会ということになるのですが、以前の話にあったようにこれがもともといた現地の家庭科の先生なのですが、この先生がいらっしゃったことと、校長先生が要請された時と変わっていて、ボランティアに全く関心がなかったということで自分が 3 か月使い物にならなかつ

たということもあって、大丈夫かなって自分の必要性を感じたり。特にこの家庭科の先生はなかなか心を開いてくれることがなくて私はヒロアとよばれていたんですが、お金を持ってるし余裕があるからいろいろできるのよっていわれて、ほんとに遠ざけられていたんですけども、最初は必要性に疑問を感じていたところを自分の気持ちを切り替えて自分から必要とされる場所とか見つけて行こうと切り替えてもうしばらくあせらずに一緒に郊外の授業だけでなくミーティングであったり清掃活動であったりとか一緒にやってる内にだんだん心が打ち解けてきてこの講習会彼女が手伝ってくれて達成できたものになります。この心を打ち解けてくれた同僚の先生が村の女性とか他の家庭科の先生に講習会やってくれるし、いろいろ教えてくれるからって声をかけてくれて、それでできるようになったということで、ほんとに技術協力しようとこちら意気込んでいくんですけど、実際いってみると向こうがどれだけそれを受け入れるだとか、必要としてくれているかとかそういった相手の姿勢とか態度とか協力がなければできないこともたくさんあって、ほんとにそういった相手の協力の姿勢とかの大切さを実感していました。

これは学校の放課後の様子になるんですけど放課後になると生徒はスポーツが大好きでサッカーがはやっていましたが、いつもやっていました。遠足というものが私がいくまでなかったんですけど、家庭科で作った作品をバザーなんかで売ってお金に換えて、その資金でいって見たらどうか、思い出づくりをしてみてもどうかと提案してみたところ、受け入れられて遠足を実行しました。これは海までいった遠足の写真になります。学校外の活動として学校以外にも自分で何かできることはないかと、あいた日をさがしながらやっていたんですけど、市場で服づくりをしたり、村でお菓子づくり講習会をしたりとか。詩集の教室をした時には日本食を伝えようとうどんを作ってみたりといった事をしていました。あとこれ私が活動中に大きな地震がおこったんですが、2007年4月マグニチュード8.1の地震が occurred。死者52名をだしたソロモン諸島で非常に大きな地震で私自身はその震源地から少し離れた所にいましたので、何もなかったんですけど。家とか倒壊して村ごと住む所をなくなってしまったところもありましたので、なにかできることはないかと、私と隊員がソロモンの中に20名ほどいましたので、日本から来た医療で現地に届けるよりはこちらでお金に変えた方が有効なものを販売してそのお金を現地に売るということをしました。あと環境教育イベントということを他の隊員と協力して行いました。

ちょっと飛ばします。食事の話、普段はココナッツとかじゃがいも、キャッサバという芋をたべていました。川でエビや魚も取れますのでこう言ったものも食べることができます。しかしこう言ったものはとりすぎるとすぐいなくなるので、ほんとに月一回とか多ければ二回とか、私自身も食生活がすごい偏って、炭水化物、長持ちできて冷蔵庫がないので、比較的安くて、はこぶのに簡単なものとなるとどうしてもインスタントラーメンであったりビスケット、米小麦というものになるので非常にかたよってたんですが、右下は米にインスタントラーメンをかけているもの。それはよく食べていました、あとパン。家庭科の教員でするので栄養指導もしたくって、栄養の知識は生徒には伝えますし、生徒は小学

校のときから聞いていますので、知ってるところもあるのですが、実際野菜は雨が降ったら実らないとか果物も食べてしまったら終わりだし粉ミルクでも入れたらカルシウムが増えるのですけども、高いということでなかなか現地の生活に見合ったもので栄養バランスのいいものを定着させるのは難しいなということを非常に実感しました。飲み水は雨水か川の水を使用していました川は上流まで行ってきれいな水をとってきました。お祝い事するときなどはブタを解体して食べたりしていました。普段は入浴とかも川にざぶんと入るだけ、食器洗いはこうやって川で葉っぱでみがいたりするんですけど、もう全部一か所でやるので衛生的には悪くて現地の人は昔からこうしてきたということでやめたほうがいいんじゃないかとおもったんですけども、もうこういう生活スタイルでしたので私も一緒にしました。ガスはありませんので電気はランプを使用していました。キリスト教国ですのでわたしが活動していた時はこういうのに参加していました。伝統的なダンス、カスタムダンスというのがあるんですが、男性のもの女性のものとありました。ソロモンの重要にされる文化にワントクという文化があります。ワントクというのは同じ言葉ワントーク同じ言葉を話す仲間というのがあって助け合い分かち合うというのが当然という意味が含まれワントクなら無償で協力しなければならないという非常に家族親戚などは絶対見放しませんもしお金に困っていたら、自分たちあんまり余裕がないんだけどすぐあげたりとか、食べるものなくなったから少し住ませてくれていったらいやな顔ひとつもせずがいいよってうけいれたりそういったところは本当にすばらしいなと思いました。けど大変そうだなとみても思ったんですけど、こういった文化私もここで生活する以上同じことはできないんですけども、やっぱりいろいろ頂戴いろいろよくしてあげるからほんとによくしてくれるのはしてくれるんですけどもそういった文化どこまで受け入れるのかはすごく悩んだ時期もありました。

ソロモンで困ったこと。先ほどいった食中毒はきっと水かなにかが悪かったんだろうと思うんですがキャッサバという、物を食べたのですが毒の部分もあるということでしっかり洗う水もなくてそういったものをそのまま食べたのかなって今になって思います。皮膚病になって全身の皮がはがれる、きっと汚い水でやられたのかなと思います。でもこういったものも現地で生活してたらなおっていつて対応していくことができました。

ソロモンに行ってもよかったこと、いろいろたいへんなことはあったのですが今自分が日本で生活していることを考えても本当によかったことの方が多かったようにおもいます。あとソロモンで他の隊員も活動していたのですが他の人達にも非常に支えられ刺激になっていました。

帰国後の活動として帰国した後に新しい家庭科教員が私が勤めていた同じ所に入って活動していることもあって今やっているプロジェクトでもあるのですがその学校と私の勤めている学校で交流を行っております。計画として4回を決めてやっております。あちらから文通で手紙が来たりこちらから手紙を送ったり向こうから隊員が撮った画像が送られてきたりとかこうやって生徒が見て行ったりとかの交流をしました。こういう新聞も廊下に

掲示して学校交流を行いました。やってみてまだ継続中ではあるのですが生徒の感じ方と言うのは人それぞれで生徒によっては興味がわいたとってみたり汚いし絶対いやという悲しいこともあるんですが伝え方が難しいなにかしら生徒たちは映像とかをみて、あと交流をしたりして感じるところもある。またそうやって最初汚いから嫌ってという人も学校交流をして現地の楽器をみて楽器で演奏しているところをみてここだけは興味があるってってもらったりとかまた長く続けていくと変わっていく部分もあるのでそれは今期強く楽しみながらやっていくということが大切なんじゃないかなっていうことを感じています。

お手元に配布させていただいた資料の裏の部分なんですけどそれは学年集会でソロモンで活動したあとの生徒が書いた感想文になります。学年の他の先生が学年新聞としてまとめてくれたんですが非常にそうやって協力を受けられたってありがたくってそこから生徒がいろいろ感じてくれたんだなって思います。これからなんですけど私は退職してからもボランティアなんかで人の役に立てたらいいなとおもうんですがこれから参加を考えている先生方がいらっしゃるかもしれません、もしまよっていらっしゃるんであれば思い切っていつてみるのもいいと思います。ご清聴ありがとうございました。以上で発表を終わらせていただきます。